創 刊 の 辞

私たちは 2003 年度に「『人類の幸福に資する社会調査』の研究」に対して 21 世紀 COE プログラムの採択を受けた。その後、さまざまのプロジェクトや研究班に分かれながら研究を続けてきたが、成果の一つとして本雑誌の創刊を企画した。

創刊号は「幸福と不幸の社会学」特集とした。COE プログラムのテーマは、社会調査の研究であって幸福そのものを研究対象としているわけではない。しかし幸福についての理解がなければ、どのような社会調査がそれに役立ち、どのような社会調査がそれに役立たないのかの判断がつくはずがないという意味では、やはり人類の幸福とは何かを出発点とせざるを得ない、と考えた。第 2 号は「社会調査の社会学」特集とすることがすでに決まっている。創刊号と第 2 号とは私たちのプログラムにとっては言わば総論で、当該テーマに関する研究の棚卸をめざしている。論考のほとんどが「綱領的」ないし問題提起的なスタイルをとっているのはそのためである。第 3 号以降は、「人類の幸福」という壮大な目的に対して言わば各論的に迫っていく。

私たちの創刊にかける思いは『先端社会研究』の「先端」性に凝縮している。多くの雑誌が、様式化されたピア・レヴューの厳しさのために、内容の闊達な展開や野太い主張を阻害しているかに思える。しかし私たちが最重要視するのは研究の先端性である。先端性とは何か。それは未開拓、月並みでないこと、非自明、先駆け、最新、新奇、創造、革新、等の複合的意味を指している。テーマが非自明的なものであるために先端的になることもあれば、使われる方法に工夫が凝らしてあるために先端的になることもある。発想の新しさが先端性を支えることもあろう。社会学は先端的知識を開拓しつづけることが宿命でもあり、使命でもある。ランドール・コリンズはそうした社会学に近いものをかつて nonobvious sociology と呼

んだけれども、社会学の専門家以外の人々に向かって非自明的であることもさることながら、社会学研究者の間でも非自明的であることはもっと大切だ。

21 世紀 COE プログラムを直接的に支えるのは事業推進担当者と呼ばれる人々である。しかし、本誌は制度としての 5 年間の COE プログラムを完遂したのちも継続的に刊行する計画で出発した。また COE プログラムには世界的研究拠点の形成が期待されているのであるから、本誌は事業推進担当者に限ることなく、国内外の若手を含む先端的研究者に開いている。創刊の経緯から、創刊号と第 2 号は依頼原稿を中心とせざるを得なかったが、その後は投稿論文も公募したい。本誌は日本語を中心として出版するが、論文はすべて各号一冊の割りで英訳して単独の著作として刊行し広く世界に発信していくつもりである。

本誌は『先端社会研究』を名乗っており、「社会学」を自称しなかった。それには小さな訳がある。一つには、人類の幸福に資する社会調査は、狭く社会学や社会福祉学に限られる仕事だとは思っていないこと。もう一つには、その裏返しとして、あくまでも社会学と社会福祉学を中心に研究を押し進めていくとしても、社会研究と呼ばれるにふさわしい広い視野を持ち広く人文・社会・自然科学に少なからぬ影響を与えることを志したいと思っているからである。したがって「社会調査」も「社会研究」といったくらいの広義に解釈しておく必要がある。

さて、世間に目を向けてみよう。大いなる科学技術の進歩にもかかわらず（あるいは、それが故にと言うべきだろうか)、世の中には不幸、不条理な苦痛が満ち満ちている。多くの人々が災害からの復興に苦しみ、空爆が行われるからと言われて着の身着のままで住み慣れた村を離れ、無為の戦いと飢えと痛苦に苦しんでいる。世界は、日本は豊かになったとは言うものの、地球の実態はそのようなものである。都市化の進んだ現代日本で最近頻発している「熊による被害」も、熊に言わせれば「自分たちこそ被害者」と言いたいところかもしれない。私たちは「人類の」幸福を掲げてはいるが、人類の幸福だけではなく生きものすべての幸福を考えたいと思っている。

人類の幸福のことを考え始めれば、早晩私たちは不幸の問題にたどり着く。近代に入って、不幸がそれ以前の時代よりも増大したかどうか、近代の不幸に固有の特徴は何か、については論を待たなければならないけれども、地球の隅から隅まで幸福が行き渡ったという経験を人類は未だ持っていない。特集のテーマを「幸福と不幸の社会学」としたのはそのためである。

2004 年 3 月 26 日、私たちは COE シンポジウムの一環として一つのシンポジウムを開いた。そのときの統一テーマを私たちは「社会学は歴史を動かすか」とした。むろん、私たちは「歴史を動かしたい」と思ってのことであった。学問に実践への貢献を期待すること自体は珍しいことではない。しかし、私たちの COE プログラムはとくにそうした志向性が強い。最終的にはソーシャル・サイエンス・ショップ（S キューブ）を立ち上げて市民・行政から持ち込まれる（あるいは、私たち自身が持ち込む）さまざまな問題の解決のための政策提言をし、しかもその実現を見届けるための追尾も行ないたい。

本誌の創刊によって、「人類の幸福」という大目的が微分的にであれ確実に実現することを目指したい。

2004 年 12 月

関西学院大学大学院社会学研究科
21 世紀 COE プログラム拠点リーダー
高坂　健次